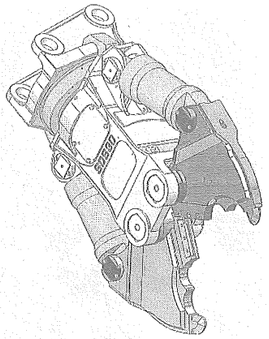
家・店舗向け小型解体機

坂戸工作所 地場工務店に販売

鋼板やコンクリートを切断する解体機メーカーの坂戸工作所（千葉市、坂戸誠一社長）は、戸建て住宅や店舗の取り壊しに適した小型の解体機を開発した。戸建て向けは解体機の種類が少なく、工事現場では機械を使わずに手作業で壊す例も多いという。主力の大型機の販売が伸び悩む中、戸建て住宅などの解体件数は比較的安定していることから、小型機の需要も大きいと判断した。

主力の大型機伸び悩み



坂戸工作所が開発したショベルカーの先端に付ける小型解体機（イメージ）

開発した解体機は長さ1・2メートル、幅80センチで重さは約300キログラム。小型のショベルカーの腕の先端に取り付けて使用する。鋼板など金属の切断用とコンクリートの破砕用、切断した資材などをつかむタイプの計3種類を用意した。

ベアリング（軸受け）やサスペンションなど駆動部は共通で、先端にそれぞれの解体に適した刃を取り付ける。

ビル解体などに使用する同社の主力の解体機は重さ3トン程度あり、刃を取り換えるには重機を使って1時間以上かかる。今回開発した解体機は部品数をほぼ半減したほか、ネジを外すだけで取り換えができるよう改良。10分程度で重機を使わずに1人で対応できるようになった。

解体能力も高い。開発した小型機は大型機のノウハウを導入しているため、既存の戸建て向けの解体機に比べて、2倍の厚さの鋼板を切断できるという。

デベロッパーの倒産が相次いだ2008年以降、再開発に伴うビルの解体など規模の大きな解体工事は減少している。一方、7月の全国の新設住宅着工戸数が2カ月連続で前年同月を上回るなど、戸建ての需要は回復しつつある。建て替え需要もあり、解体機の販売につなげる考えだ。

駆動部1台と3種類の刃を合わせた1セット230万円で販売する。11月に展示会などに出品し、年明けの発売を目指している。

地場の工務店など規模の小さい建設業者向けの販売を想定しており、使い勝手のよさをアピールする。既に数件の問い合わせもあり、年間100台の販売を狙う。

京成バス 小湊鉄道

高速バス乗り入れ

羽田新国際ターミナルへ

京成バス（東京・墨田）と小湊鉄道（千葉県市原市）は16日、東京東部や千葉県内と羽田空港を結ぶ高速バス路線で、10月21日から羽田の新国際線ターミナルへの乗り入れを始めると発表した。京成バスは一部路線で午前0時台の羽田出発便を新設する。小湊鉄道も羽田出発の最終便を20～30分程度繰り下げる。早朝や深夜の就航路線に対応してダイヤを見直す。

京成バスは他社と共同運行する6路線を新国際ターミナルに乗り入れる。船橋や千葉、東京東部を結ぶ路線では、運賃は倍となるが午前0時台に羽田を出発する深夜便を運行。千葉県内主要地区と結ぶ一部路線では早朝・深夜に既存の第1、第2ターミナルには止まらない直行便を新設する。

日中の一部時間帯に幕張メッセに新たに停車させるほか、羽田発の時間帯を従来より早めるなど、千葉市の幕張新都心方面の利便性も高める。

小湊鉄道も千葉市の蘇我地区や木更津市などと結ぶ路線で、羽田発の最終便を午後11時台に繰り下げた。

羽田の新国際ターミナル開業で利用者数の増加が見込めるほか、早朝や深夜に出発する国際線もあり、これまでとは異なる移動需要も大きくなるため、乗り入れに合わせて旅客のニーズに合わせた運行体制とする。

「成田空港、時間延長を」

県経営者協 知事に4項目要望

千葉県経営者協会（千葉市、綿貫弘一会長）は成田空港の運用時間の延長などを柱とする政策要望書を森田健作知事に提出した。要望書ではアジア各国の空港との競争が激しくなっており、成田空港は運用時間の延長や周辺の観光資源の開発が必要としている。

県経営者協会は定期的に要望書を渡しており、今回は成田空港の競争力強化、主要幹線道路の建設、地域経済の活性化、行財政改革の推進の4項目を取り上げた。

空港関連では運用時間を延長して貨物の取扱量を増やすとともに、空港周辺にカジノを含めた娯楽施設の設置の検討が必要とした。

道路では「近隣他県と比べ道路事情は劣悪で、特に県北西部では渋滞が慢性化している」と指摘。首都圏中央連絡自動車道（圏央道）や東京外郭環状道路（外環道）の早期の全線開通を求めた。

県内経済の活性化のため、外国人観光客のさらなる誘致や、優秀な企業を表彰する制度の創設、県内企業に配慮した入札制度の導入なども必要だとした。

行財政改革では県の外郭団体の統廃合や、民間への業務委託による職員の削減を要望。職員の早期希望退職の実施も重要とした。

TX、来月ダイヤ改正

夕方から夜の運転増やす

つくばエクスプレス（TX）を運行する首都圏新都市鉄道（東京・台東、高橋伸和社長）は10月、大規模なダイヤ改正を実施する。秋葉原駅からつくば駅までの区間で、延長運転を含め計21本増便。夕方から夜の運転本数を増やし混雑の緩和、利便性向上を図る。

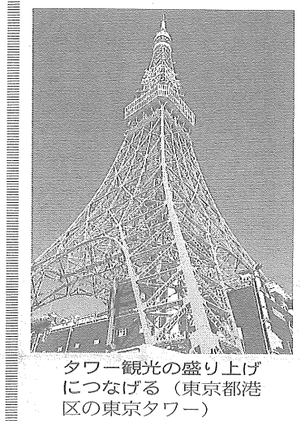
平日午後6時台の守谷駅発秋葉原行きの区間快速、秋葉原駅発守谷行きの普通列車をそれぞれ1本増発。秋葉原駅発八潮駅行きを守谷行きに、八潮駅始発秋葉原駅行きを守谷駅始発に変更、上りと下り合わせて計7本を延長運転する。これまで普通列車の数が少なかった同区間を縮小する。

茨城県つくば市の性格美人（ペンネーム）さんは、9時～長運転の電車の待ち時間を利用して「完全制覇」をすべく、全国の東京タワー（東京・港）や通天閣（大阪市）、福岡タワー（福岡市）など全国の20のタワーでつくる任意団体「全日本タワー協議会」は10月1日、全国共通のスタンプラリーを始める。

全国を4地域に分け、各地域のタワーのスタンプを集めると認定証と記念品を贈呈する。建設中の東京スカイツリー（東京・墨田）の注目度が高まる中、タワー観光を盛り上げる。

国内20タワー スタンプラリー

地域内制覇で記念品



タワー観光の盛り上げにつなげる（東京都港区の東京タワー）

スタンプ帳は1冊300円で、有効期間はスタンプ帳購入日から1年。東日本地区のブロックごとにテレビ塔、銚子ポートタワー、横浜ランドマークタワー計6塔。東日本地区の北部・北陸・東海・九州。

JR東

品川に資源循環施設

車内のごみ分別など統合

東日本旅客鉄道（JR東日本）は10月1日、東京都品川区内の貨物駅に隣接した土地にごみのリサイクル施設「資源循環センター」を開設する。駅構内で出る缶、ビン、ペットボトルの分別・リサイクル業務に加えて、列車内のごみの分別や紙リサイクルなどを統合する。

東京タワーに隣接する計約5万㎡の資源循環施設。

宇都宮にも直営の農場

イオンアグリ創造

イオンの全額出資会社、イオンアグリ創造（千葉市）が宇都宮市内で農地を借りて野菜の栽培を始めることが16日、明らかになった。今秋から農地を確保し、作った野菜はイオングループの「ジャスコ」などで販売する計画。生産履歴のはっきりしたプライベートブランド（PB＝自主企画）野菜として、消費者にアピールする。

栃木県農政部によると、民間企業が県内で農業生産法人などを立ち上げたケースはあるが、直接、農業に参入するのは初めてという。同社は2009年7月から茨城県牛久市内で農地（現在6ヘクタール）を借りて白菜、・出荷場は2籠谷町地。貸から6やパー に従事 ―

◇創 25、26 野商工 駅下車 沼駅下 業に興 ら間も した計 も午前 半。経 税理士 構えや 方、経 て学ぶ 円（資 人の先 スなど わせ・ 議所中 7・4 日フェ

ちばの風

経営もできる農業「仲間」を育成

生産者連合デコポン（成田市）

10月1日から成田市などを中心に新たな農業者育成プロジェクトが始まる。企業の協力も得て流通や加工など川下部分まで学べるユニークな取り組みの仕掛け人は、生産者連合デコポン（成田市）の井尻弘社長。農業ビジネス全体を学べるとあって注目されそうだ。

「農業技術者育成科」と名付けたプロジェクトは、約3カ月にわたって成田市や多古町、匝瑳市などを拠点に座学や実習を通じて農業を学ぶ。シダックスや食品通販のオイシックス（東京・品川）なども協力する。

県内や都内から約20人の応募があり、選考を経た10人を1期生としてスタートする。デコポンは今後も事業を継続的に手がける方針だ。

デコポンが農業者育成に自ら乗り出すのには訳がある。社長が目指す「いちじく日本一プロジェクト」の仲間づくりにつなげたいためだ。

愛媛県宇和島市出身の井尻社長が「子供のときから慣れ親しんだ」のがイチジク。今でも「朝・昼食に欠かさない」ほどだ。食物繊維が豊富で加工もしやすい。「新しい食べ物に敏感な若い女性を中心にブームが起こるはず」と確信し、7年ほど前に栽培を始めた。

しかし、イチジクは寒さに弱く栽培に手間がかかる。過去2度ほど全滅し「やめようかと思ったこともある」。現在の作付面積は約1ヘクタール。今後5年で5倍に拡大し「単一の生産者としては日本最大級を目指す」と話す。

「これ食べてみてよ」と井尻社長が差し出したのは、表面が赤い一般的なイメージとは異なる少し青白いイチジク。皮ごと食べるとネクターのような濃厚な味わいが口の中に広がる。

井尻社長が注目する「バナーネ種」だ。一般的な「ドーフィン種」よりも甘さが強く、ネバネバ感が少ない。「バナーネ種」は食べ方が簡単で、ジャムやジュースなど加工商品の販売やイチジクのキャラクターを作るなどの構想は膨らむ。

千葉世界

イチジク生産、夢は日本一

そのためにも作物を育てるだけではなく、加工や流通まで熟知した生産者を育てる必要がある。人材育成が軌道に乗ったとき「イチジクで日本一」の夢がもう一歩、実現に近づく。

生産拡大に備え 県内で用地確保

2008年の統計によるとイチジクの生産額で全国トップは愛知県（35億円）。和歌山（9億円）、福岡（7億円）などと続き、千葉は2億円と全国7位だ。

レストランやケーキ店を中心に、イチジクを使った料理や菓子などの商品化の動きが広がりつつある。大消費地の東京に隣接する千葉での生産も伸びていきそうだ。

県内での主産地は市原市や木更津市など東京湾沿いの地域。デコポンも地盤とする成田市や多古町などにも農園用地を確保し生産拡大に備えている。

千葉支局 043-227-4346